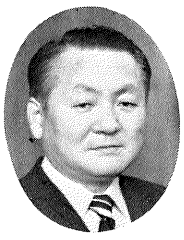
福岡大学医学会ニュース

第2号

福岡大学医学会
福岡市西区七隈
福岡大学医学部内
印刷　福岡印刷株式会社
福岡市博多区東那珂一丁目10-15

物事の二極性――研究における地域性と国際性とを両立させよう

会長　西園昌久



数年前に、南太平洋のタヒチで世界精神医学会のシンポジウムがあり、それに参加したときのことである。タヒチという島はヒョウタンのような形をした腰のくびれた二つの部分からなっているがその一方の田舎の方にある老人病院に案内された。ところが、その病院は建物も瀟洒であったが、それよりも住む老人の心理を考えた建物であるのに心がうたれた。平屋でパビリオン方式で一つずつの病室が一戸で、それを馬蹄型の廊下がつないで、中央管理部門とか集会所とか食堂とかがもうけてある。各戸の病室も広い一室であるけれども、それを簾や衝立などで区切って入院している数人の一人一人のテリトリーが確保されている。つまり、集団活動への誘導とプライバシーの保証とが建物のなかにいかされている。これが地球最後の楽園といわれるタヒチのそれも、ゴーギャンさえも訪れたろうかといぶかるほど田舎に現にある世界であった。

タヒチはフランスの保護領であるために、フランスの政策がとられている。この病院の建築も、建物は治療の道具であると主張するフランスのシバドン教授の理論がとり入れられたのであろう。シバドン教授は人間の精神の安定と進歩発展には、二面性、あるいは二極性を満足せねばならないと説いている。人間関係でいうと、依存性の満足と独立・自立性の促進とである。そのために、彼は、精神科に限らず、病院では、集団活動を促す空間とプライバシーを守る空間とが準備されねばならないとくのである。私はこの全体と個とをいずれも満たそうとする彼の主張と実践とは何も建物だけに限ったこととは思わない。人間が安定と進歩を確実なものにするためには、私どもが考えねばならない真理をふくんでいると思うのである。

研究における地域性と国際性、診療における専門性と一般性はたえず問題になることであるが、人間存在の基本的本質のなかにそうした二極性をもっているものであることを知るべきではなかろうかと考えている。わたくしどもの福岡大学医学部も来年は創立一〇周年をむかえる。そろそろ学風ができてくるころであろう。私たちの存在を確実なものにし、発展させるためには、地域に根をおろすとともに国際性を育成せねばならないそのいずれにも偏っては不安定なものになろう。私たちは福大医学部の研究において広がりの活動と深まりの活動との二極を確保促進したいものである。

＝医学部長・精神医学教授

欧米の医学博物館を訪ねて

菊池昌弘

去年七月より三カ月間西ドイツ、イギリスおよびアメリカ各地を視察したが、その間医学博物館が医学教育や地域社会における保健衛生教育の面で如何に活用されているかを見聞したく思い、いくつかの博物館を訪れる機会を得たので、これら諸施設についての概要を報告する。

一、西ドイツ

Heidelberg 大学病理 museum ならびに Deutsches Medizinhistorisches Museum を訪れた。前者は、医学部学生用であり、後者は一般の人々に公開されているが、医学史的にみても興味深い器材や臓器標本が整理展示されていた。

Heidelberg 大学病理 museum は五階建ての病理学教室の一階にあり、多くの肉眼標本とともに旧い医学書や医療器材が展示されていた。主任教授である Doerr 教授が心臓を専門としているために心奇形が数多く集められ、その一部のものは蠟で固められ学生が直接手を触れることが出来るようになっており、奇形の理解には極めて有効であるといっていた。

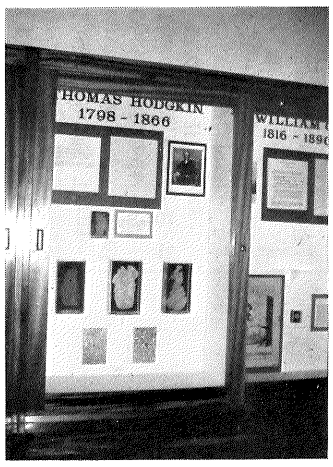
Deutsches Medizinhistorisches Museum は München 北方約五〇㌔の古くは大学町であった Ingolstadt（一四七二―一八〇〇の間ここに München 大学があった）にある西ドイツ唯一の医学歴史博物館でヨーロッパばかりでなくエジプトやギリシャ、さらには中国や日本の医療器具が年代別系統的によく整理して展示されていた。また二階建ての博物館に併設された庭園には、種々の薬草が植えられ訪問者の興味を引くようになっていた。訪問時丁度近くの小学生の一団が課外授業として来訪し、熱心に先生の説明を聞きながら色々と質問をしていたことは、このような施設が地域社会とよく密着して活動している一つの表われとして喜ましい点であった。

Deutsches Medizinhistorisches Museum (Ingolstadt)

二、イギリス

多くの人々からぜひ訪問すべき医学博物館として推賞された Gordon Museum ならびに The Wellcome Museum of Medical Science の二施設を見学した。

Gordon Museum は London 大学 Guy's Hospital の一角をしめる、肉眼標本を主として、簡潔な病歴、必要な組織像のスライドも用意され標本を有機的に利用出来るようになっていた。また壁面の一部を利用して標本に関連のあるテスト問題が掲示されていた点も教育上の配慮が行きとどいているものであった。博物館は三階に及ぶ中央は吹抜きになった部屋四つを占めていたが、一階にカンファレンス室があり、標本を見ながら講義が行われていた。



Gordon Museum (London)

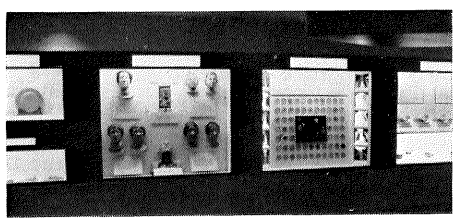
さらにこの博物館では、収集されこれだけの施設を三人の技術員と一人の事務員で管理し、外科医や病理医が標本選択を行っているのは、参考になる点が大であった。

The Wellcome Museum は、医学関係者を対象として感染症、熱帯病を主な対象とした博物館であるが最近癌、遺伝性疾患さらには心臓病の部門も加わっていた。パネルを用い各々の疾患について病因、疫学、免疫、病理、臨床、診断、治療、予防とよくまとめられ、これに実物標本や多くの写真、イラストが加えられて理解しやすいようにしてある。展示内容も年々新しい知見が得られれば改変とくに内分泌疾患に関しては立派な内容を有していた。

これらの博物館を見て感じたことは、いずれも豊富な材料、資料を如何に有効に供覧出来るかと不断の努力がみられること、常に新しい知見を取入れ改善がはかられていることは敬服するばかりであった。とくに Gordon Museum は病理医のみでなく医学教育に携わるものはぜひ一度は訪問すべき施設と考えられた。

我国においても札幌医大や川崎医大で医学博物館があるが、歴史も浅く、この方向については極めて立ち遅れている現状である。何時の日かわが福岡大学の一角にも医学博物館が出来上ることを期待する。

＝医学部教授・病理学第一担当



Mayo Medical Museum (Rochester)

三、アメリカ

Armed Forces Medical Museum ならびに Mayo Medical Museum を見学した。

Armed Forces Medical Museum はその組織標本の蒐集とスタッフの充実さで世界中の病理学者から注目されている Armed Forces Iustitute of Pathology に所属しその一階を占める。医学関係者を対象とし、軍陣医学を主とした展示であるが、顕微鏡については電子顕微鏡とともにその歴史的収集はすぐれたものであった。

Mayo Medical Museum は病院を受診する患者が対象で、疾病のみでなく広く人体構造に関する知識を得るように多くのパネルや模型を用いての展示があり、スライドや映画も上映され、内分泌疾患に関しては立派な内容を有していた。

これらの博物館を見て感じたことは、いずれも豊富な材料、資料を如何に有効に供覧出来るかと不断の努力がみられること、常に新しい知見を取入れ改善がはかられていることは敬服するばかりであった。とくに Gordon Museum は病理医のみでなく医学教育に携わるものはぜひ一度は訪問すべき施設と考えられた。

我国においても札幌医大や川崎医大で医学博物館があるが、歴史も浅く、この方向については極めて立ち遅れている現状である。何時の日かわが福岡大学の一角にも医学博物館が出来上ることを期待する。

＝医学部教授・病理学第一担当

学位論文試問始まる

論文提出による学位申請も可能

昭和五十三年度に大学院医学研究科が設置されてから、ほぼ二年を経過した。すでに、大学院学生として、二十八名の人達がそれぞれの専攻分野で研究を続行中であり、明年度末には第一回生が所定の課程を終了し、福岡大学において最初の「医学博士」が誕生するはずである。

本学大学院医学研究科小委員会では、これに呼応して「学位申請取扱細則」の検討を行っていたが、昭和五十五年九月十九日付にて正式に発効した。その結果、大学院の正規の課程を修了して学位を取得するコースのほか、論文提出によっても学位を申請する道が拓かれた。もっとも、論文提出による学位は、大学院課程修了者が学位を授与されてから、はじめて審査出来る性格のものであるが、すでに論文が完成している人もあるので、医学部・病院創設期より本学の発展に貢献した人に限って、論文審査だけを予備的に開始することになった。現在、このような特例措置によって学位申請を行っている人は十三名あり、目下試問が行われつつある。これらの人々は、最終審査によって可となれば、昭和五十七年四月以降に本学大学院委員会の議を経て、「医学博士」の学位を学長から授与されることになっている。

なお参考までに、論文提出による学位申請資格と、それに必要な研究歴を「医学研究科学位申請取扱細則」より抜粋すると次のとおりである。

資格申請

論文提出による学位を申請することのできる者は、次の各号の一に該当する者とする。

一、本学大学院医学研究科博士課程に所定の年限以上在学して所定の単位を修得し、かつ必要な研究指導を受けたのみで退学した者。

二、医学士（または歯学士）の称号を有し、本学の医学部または病院の教育職員（医員を含む）として研究に従事する者で次のいずれかの研究歴を有する者。

(イ)基礎医学において五年以上。
(ロ)臨床医学において六年以上。
(ハ)基礎医学において二年以上の研究歴を有する者で臨床医学の研究歴と合わせて五年以上。

三、医学以外の学士または学位の称号を有し、本学の医学部または病院の教育職員として研究に従事する者で次のいずれかの研究歴を有する者。

(イ)教育職員で学士八年以上、修士六年以上、博士（満期退学を含む）五年以上。
(ロ)教育技術職員または医療技術職員を経て、教育職員に身分換えとなった者は六年以上。ただし、教育技術職員または医療技術職員の期間が二年未満のときは八年以上。

四、本学医学部研究生については前各号に準ずる。ただし、原則として常勤者に限る。

（本学医学部または病院の教育技術職員及び医療技術職員の学位申請については別途考慮する。）

研究歴

研究歴とは、次の各号に掲げる期間をいう。

一、大学の医学部または病院の専任教育職員として研究に従事した期間。
二、大学院を退学した者の場合は、大学院に在籍した期間。
三、研究生として在学した期間。
四、福岡大学病院に医員として在籍した期間。
五、福岡大学病院に臨床研修医として在籍した期間の二分の一の期間。
六、委員会が権威あると認定する研究機関において専任職員として研究に従事した期間。
七、委員会が大学の病院に準ずると認定する教育病院に医員として在籍した期間及び臨床研修医として在籍した期間の二分の一の期間。
八、委員会が前各号と同等以上と認定する機関において研究に従事した期間。
九、委員会が前各号と同等またはそれ以上の研究歴として特に認めた期間。

第七〇回医師国家試験七名合格

昭和五十五年秋の国家試験には、本学卒業生二十二名が受験し七名合格（合格率三一・八％）した。合格した諸君は、計二百二十名となった。この結果、福岡大学卒業生で医師の仲間入りをした人は全員福大病院にて研修中である。

学位取得

守下　秀治（薬理学）
九州大学に提出、昭和五十五年八月十八日付で薬学博士授与。
学位論文「アドレナリン効果薬とくにドーパミンの血管作用に関する薬理学的研究」

梅田　昭子（微生物学）
九州大学に提出、昭和五十五年十月二十九日付で医学博士授与。
学位論文「ブドウ球菌細胞壁中での高分子の配列」

畝　博（公衆衛生学）
岡山大学に提出、昭和五十五年十二月三十一日付で医学博士授与
学位論文「チェンソーによる振動障害に関する研究」

在外研究員として 菊池教授欧米へ

昭和五十五年度福岡大学在外研究員として病理学第二菊池昌弘教授が選任された。同教授は欧米における病理学を主とした視聴覚教育の現況と地理病理学的にみた造血臓器疾患の機能病理学的研究を目的とし、昭和五十五年七月九日より同年九月二十四日まで西ドイツ、イギリス、アメリカの各大学、研究施設を歴訪、帰国された。その間各地で病理学者を対象に左記のごとき講演を行い、福岡大学における研究活動の一端を紹介されて感銘を与えた。

○いわゆる壊死性リンパ節炎（キール大学）○日本における悪性リンパ腫（キール大学）○日本における成人のT細胞性悪性リンパ腫（ハーバード大学）○日本におけるPCB中毒症（米国陸軍病理学研究所）○日本人のT細胞性悪性リンパ腫（メイヨークリニック）

学術交流

昭和五十五年度四月以降の海外留学又は海外出張者はつぎのとおり。①研修先②目的③期間

海外留学

小川皓一（解剖学第二）①南カリフォルニア大学②虹彩筋の微細構造の研究③55・5～56・4

原　健二（法医学）①スイス・チューリッヒ大学法医学研究所②質量分析法による薬毒物の証明③55・9～56・9

佐々木悠（内科学第一）①米国イソ②第2回国際細胞生物学会③55・8・31～55・9・5

大場三栄（生理学第二）①米国②生理学研究③55・7・16～55・9・13

松岡雄治（生化学第一）①フランス、ノルウェー②国際免疫学会議及び免疫リュウマチ研究所視察③55・7・19～55・8・2

松岡雄治（生化学第一）①アメリカ合衆国②癌免疫学の研究打合せ③55・9・27～55・10・4

池原征夫（生化学第二）①アメリカ②分泌蛋白質の無細胞系蛋白合成とシグナルペプチドの一次構造の研究③55・7～8

濱崎直孝①アメリカ②ホスホエノールピルビン酸の赤血球膜透過の研究③55・9～10

古川達雄①ヨーロッパ・アメリカ②臨床薬理学に関する視察および討議③55・8・30～55・10・12、55・10・27～55・11・29

寺崎邦生（寄生虫学）①韓国②熱帯医学セミナー③55・6・8～55・6・20

波部重久（寄生虫学）①韓国②熱帯医学セミナー③55・6・8～55・6・12

宮崎一郎（寄生虫学）①台湾②肺吸虫の共同研究③55・4・21～55・4・26

波部重久（寄生虫学）①フィリピン②国際熱帯医学、マラリア会議③55・11・7～55・11・17

永田武明（法医学）①ギリシァ・スイス②国際法医中毒学会出席、毒物分析に関する情報交換③55・8・16～55・9・5

奥村　恂（内科学第一）①西独②第11回欧州消化器会議出席③55・6・8～6・15

八尾恒良（内科学第一）①台湾②第三回アジア・太平洋消化器内視鏡学会③55・9・25～9・27

教正院敬子（内科学第一）①カナダ②第18回国際血液学会議③55・8―16・8・22

荒川規矩男（内科学第二）①アメリカ②高血圧サテライトミーティングおよび第17回国際高血圧学会③55・5・9～55・5・14

荒川規矩男（内科学第二）①アメリカ②国際降圧療法シンポジウム③55・10・20～10・25

佐田禎造・藤野正典・佐々木靖・吉田豊和・北島幸治（内科学第二）①アメリカ②アメリカ心臓病学会③55・11・7～11・23

牛島定信・松木邦裕（精神医学）①フィリピン②第2回太平洋精神医学会③55・5・12～5・19

西園昌久（精神医学）①韓国②第2回太平洋精神医学会韓国集会③55・5・23～5・27

西園昌久①スェーデン②国際精神分析学会③55・6・19～6・30

大島健司（眼科学）①フランス、イギリス②国際人工水晶体学会、ジュネーブ角膜内皮研究会、ロンドン人工水晶体手術会、ブライトンヨーロッパ眼科学会③55・4・11～5・6

林　英之（大学院）①オランダ②国際眼超音診断学会議③55・9・11～9・22

曽田豊二（耳鼻咽喉科学）①中華民国②中華民国耳鼻咽喉科学会③55・11・6～55・11・12

Lowrence R. Ash ①UCLA保健学部副学部長②宮崎教授を表敬訪問③55・8・4

Anastassios Kovatsis ①テサロニキ大学助教授②法医学にて毒物検出法に関する情報交換・機器分析に関する講演③55・10・13～10・15

柴田章次①ハワイ大学医学部薬理学教授②内科学第二にて講演「新しい強心薬」③55・10・24

J. C. Barrett ①米国国立環境衛生研究所主任②内科学第二にて講演「Cell Transformation, Mutation and Cancer」③55・11・28

Richard I. Jackson ①シンシナティ大学教授②内科学第二、リポ蛋白研究室視察

John Hunter Padel ①ロンドン大学名誉教授②日本精神分析学会にて講演「Transference in the Light of Object-Relations Theory」③55・10・15～10・21

William H. Tooley ①UCSF小児科学教授②小児科学訪問③55・11

L. W. Milford ①キャンベルクリニック整形外科②整形外科表敬訪問③55・4・10

張暁楼①中華人民共和国眼科学会会長②眼科学訪問③55・5

Ronald Dubner ①NIH神経生物学・麻酔学研究室主任②麻酔科講演「三叉神経領域の痛覚」③55・6・12

来訪

昭和五十五年四月以降、本学医学部又は病院を訪れた外国学者はつぎのとおり。①所属②目的③来訪日

John A. S. McGuigan ①スイス・ベルン大学生理学教授②生理学第二にて講演「Problems on voltage clamping cardiac muscle」③55・5・27

Wolfgang Trautmein ①ザール大学生理学教授②生理学第二における研究視察③55・12・3

Yousef Tizabi ①米国・ホワード大学薬理学助教授②薬理学教室にて講演「Aggressive behavior and catecholamine」③55・12・4

Abraham M. I. Nomura ①ハワイ大学公衆衛生学準教授②重松教授と乳がん協同研究打合せ③55・5・22～5・29

Boris I. Lebedev ①ソ連科学アカデミー・極東科学センター寄生虫学研究室②寄生虫学にて吸虫類分類法についての知識交換③55・6・30～7・7

竹林　茂夫　教授

研究奨励賞

昭和五十五年度福岡大学研究奨励賞は病理学第二竹林茂夫教授に授与された。受賞論文は「(1)人の胃癌及び腸上皮化生の電顕学的研究、(2)ニトロソグアニヂンによるラット胃癌の成因に関する形態学的研究」である。

ちなみに、研究奨励賞とは学校法人福岡大学研究奨励規程により、著書・論文・発明などで学術的に著しく価値ある業績をおさめた者を表彰するもので、医学部関係者で受賞された方々はつぎのとおりである。

第九回（昭49）　生化学　松岡雄治教授

永田　武明　教授

大分県警より感謝状

わたり大分県内における司法鑑定に貢献した功績に対し、大分県警本部長より感謝状が授与された。

同教授は、昭和四十一年から同県警の嘱託医として司法解剖を担当、科学捜査の推進と向上に貢献され、これまでに凶悪犯罪、不明事件などにかかわる約五十体の遺体を解剖、鑑定を行っている。

白日高歩講師に 貝田賞

外科第二白日高歩講師は、左記の研究により一九八〇年貝田賞を受賞された。

「プレオマイシン肺臓炎の予防に関する実験的研究」

ちなみに、貝田賞とは九州大学胸部疾患研究施設において、各年度におけるもっとも優れた研究業績に対して贈られるものである。

福岡大学に 国際交流委員会

福岡大学では、外国の大学または教育研究機関などとの国際交流を促進するため、標記のごとき委員会を設置し、長期的視野にたった国際化社会への貢献をめざして本格的にとり組むことになった。

同委員会で審議される具体的な事項は、①国際交流に関する計画②外国の教育研究機関との協定、実施に関する事項③外国人教育研究員、留学生、交換学生の受け入れに関する事項④本学職員、学生などの外国留学、研修に関する事項、などである。

なお同委員会委員として、医学部から永田武明教授（法医学）、病院から有吉朝美助教授（泌尿器科学）が委嘱されている。

医学会費納入についてのお願い

昭和五十五年度の学内会員の医学会費については、本年度も原則として前年度と同様に、給与よりお引かせていただくことになりました。すでに前年度にこの方法で納入いただいた会員については、特にお申し出のない限り、来る二月分給与より引去り、一括納入していただくことになりましたので御了承ください。

本年度より新しく会員となられた方々に対しては、あらかじめ、右の納入方法についての御同意を得た上で手続きをとりたいと思いますが、事務の簡素化のため、格別の理由のない限り御賛同ください。

なお、大学院学生で未納の方々は、すでに配布した依頼状にもとづき、各自で納入していただくよう改めてお願いします。

この件に関してのお問い合せは、会計幹事木船悌嗣（内線二八八八）までご連絡ください。

海外・国際学会研究発表

（発表者名：題目．学会名，開催地，年月日）

和佐野武雄，他（解剖学第一）：The catecholamine-containing vascular endothelia of the fish brains. 11 th International Congress of Anatomy, Mexico City, Aug. 18, 1980.

三好萬佐行（解剖学第二）：Problems of bone marrow studied by SEM. International Symposium on SEM in Cell Biology and Medicine, Kyoto, May 11–15, 1980.

安澄文興，三好萬佐行（解剖学第二）：SEM observation of ovarian follicles in some animals. International Symposium on SEM in Cell Biology and Medicine. Kyoto, May 11–15, 1980.

増谷多恵子，三好萬佐行（解剖学第二）：Surface fine structures of visual cells and their arrangement in the vertibrate retina. International Symposium on SEM in Cell Biology and Medicine, Kyoto, May 11–15, 1980.

三好萬佐行（解剖学第二）：SEM studies on the ontogeny and phylogeny of the kidney. International Symposium on SEM in Cell Biology and Medicine, Kyoto, May 11–15, 1980.

曽爾　彊（解剖学第二）：Histochemical studies on LH gonadotroph. 11th International Congress of Anatomy, Mexico City, Aug. 16–23, 1980.

安澄文興，他（解剖学第二）：Cytochemical and ultrastructural analysis of intranuclear paracrystalline inclusious in human osteogenic sarcoma cells. 2nd Internatinal Cougress on Cell Biology, Berlin, Aug. 31–Sept. 5, 1980.

松岡雄治，黒木政秀，古賀芳子（生化学第一）：Purification and characterization of CEA-related antigens in feces of normal human adults. 第4回国際免疫学会議，パリ，1980. 7. 21–26.

井手口裕，濱崎直孝（生化学第二）：Rejuvenation of aged red cells by incorporating phosphoenolpyruvate into the cells. 9 th International Symposium on Structure and Function of Erythroid cells, Berlin, Aug. 27–30, 1980.

濱崎直孝（生化学第二）：Regeneration of 2, 3-DPG and ATP of stored erythrocytes by incorporating phosphoenolpyruvate; A new preservative for blood storage. 5th International Conference on Red Cell Metabolism and Function, Ann Arbor, Sept. 29–Oct. 2, 1980.

古川達雄（薬理学）：Antagonistic effects of taurine on central actions of angiotensin. 国際タウリンシンポジウム（招待演者），メキシコ，1980. 11. 17–17.

寺崎邦生，赤羽啓栄，波部重久（寄生虫学）：The geographical distribution of common liver flukes with normal and abnormal spermatogenesis. 11 th Seminar on Tropical Medicine, Seoul, June 11, 1980.

波部重久（寄生虫学）：Scanning electron microscopy of integumental surface of Japanese *Paragonimus* cercariae. 11 th Seminar on Tropical Medicine, Seoul, June 11, 1980.

波部重久（寄生虫学）：Newly recognized paratenic hosts of *Paragonimus* spp. 10th International Congress on Tropical Medicine and Malaria, Manila, Nov. 11, 1980.

奥村　恂（内科学第一）：Radioimmunoassay of conjugated chenodeoxycholic acid in serum from liver diseases. 11 th International Congress of Gastroenterology, Hamburg, June 8–13, 1980.

八尾恒良（内科学第一）：Radiological diagnosis of the non-specific ulcer of the small intestine. Annual Scientific Meeting of Society of Gastrointestinal Radiologists, Hawaii, Oct. 7–11. 1980.

八尾恒良（内科学第一）：Advanced cancer simulating early gastric cancer and the diagnosis of cancer invasion (Symposium). 3rd Asian-Pacific Congress of Digestive Endoscopy, 台北, Sept. 25–27, 1980.

荒川規矩男（内科学第二）：Vasoactive substances formed by trypsin and kallikrein. Japan Day Satellite Meeting on Hypertension, Cleveland, May 9–10, 1980.

荒川規矩男（内科学第二）：Generation of pressor substance by kallikrein from human plasma protein. 7 th Scientific Meeting of the International Society of Hypertension, New Orleans, May 11–14, 1980.

志村秀彦（外科学第一）：Cholelithiasis. Special Lecture in Harvard Medical School, Boston, May 14, 1980.

犬塚貞光，荒木貞夫（外科学第二）：Plasma copper and zinc levels in patients with malignant tumors of digestive organs—Clinical evaluation of the Cu/Zn ratio. 11 th International Congress of Gastroenterology, Hamburg, June 9, 1980.

三戸康郎，平塚隆三，土器潔（外科学第二）：Lymph nodes metastases in cancer of the thoracic esophagus. 1 st Congress of the International Society for Diseases of the Esophagus. Tokyo, Nov. 10–11, 1980.

池田　耕，三戸康郎，荒木貞夫，犬塚貞光（外科学第二）：A new trial in endoscopic diagnosis for stomach cancer by intraarterial dye (I. A. D) method with vasomoters. 4th European Congress of Gastrointestinal Endoscopy, Hamburg, June 13–14, 1980.

白日高歩，他（外科学第二）：The preventive effect of urokinase on experimental bleomycin-induced interstitial pneumonia. Annual Meeting of American Lung Association, American Thoracic Society, Canadian Lung Association and Canadian Thoracic Society, Washington. D. C., May 18–21, 1980.

平塚隆三，三戸康郎（外科学第二）：Evaluation of nuclear DNA content in the esophageal carcinoma in relation to its degree of malingnancy and prognosis. 7 th International Congress of Cytology, München, May 19–22, 1980.

大島健司（眼科学）：The chemical analysis of the material in I. O. L. ヨーロッパ眼科学会，ブライトン，1980. 4.

林　英之（大学院）：Ultrasonographic characteristics of operable massive periretinal proliferation. 国際眼超音波診断学会議，オランダ，1980. 9. 16–9. 19.

蘇萬全，曽田豊二，調重昭（耳鼻咽喉科学）：A case of American leishmaniasis. 中華民国耳鼻喉科医学会第29届学術演講会，台北，1980. 11. 8–11. 9.

坂本公孝（泌尿器科学）：Diagnostic procedures for assessment of disease extent in prostic carcinoma. International Joint Conference on Prostatic Cancer, Tokyo, Nov. 26, 1980.

海外だより

ダラス・テキサス大学

佐々木　淳

1979年12月からテキサス州のダラスにきて，アメリカでの生活も，はや1年が過ぎようとしています。ダラスといえば多くの人がかのケネディ大統領暗殺事件を思いうかべるのですが，その実は世界最大級の飛行場や，全ガラス張り高層ビルの立ち並ぶ近代的な都市でもあります。テキサスとはインディアン言語の friend と言う意味で，まさにここに住む人々はスーツの上にもカーボーイハットをのっけて，テキサススタイルのバーベキューにかぶりつきながら，陽気で，フランクなアメリカ人の中でもこのテキサス人の気質はまた格段と彼ら自身を誇っているようです。

UTHSCD の全景（後方の高層ビルはダラス市街）

来訪中の荒川教授を囲んで（佐々木宅）

今年の夏は50年振りという死者さえ出す記録的な暑さでしたが，しかし冬のやって来るのも突然で乾燥した冷たい空気の中，その変り身の激しさを感じています。物価の上昇はどこの国も同じようで，わずかこの1年の間に price card が四度，五度と貼り替えられるのをボウ然と見つめ，ここでも人々の生活はかなりきびしい様子です。

さて私の所属しているのは University of Texas Health Science Center at Dallas (UTHSCD) の生化学教室です。この大学は1943年，以前より当地にあったベイラー大学医学部がヒューストンに移転する際，一部のスタッフと学生が残り Southwestern Medical College を設立したことに始まります。その後，1949年にテキサス州立大学に移管され，1972年以降関連施設の拡張に伴い，UTHSCD という名称が正式に使われています。学生数は各学年200人で，キャンパス内には関連病院のパークランド病院（ケネディ大統領が運ばれ亡った所）と小児病院があり，ダラス市の救急病院の役割も果しています。生化学教室は chairman である R. W. Estabrook 教授の専門であるヘムタンパク質（とくにチトクローム p-450）の研究が主流です。

私は G. Larry Cottam 教授のもとで主に赤血球の膜脂質の研究を行っています。カッタム研究室は助手2人，大学院学生1人，外科レジデント1人，テクニシャン2人で，肝ピルビン酸キナーゼと脂質グループに別れ研究を行っています。また，内外を問わず交流が盛んで毎週ゲストスピーカーを招き，セミナーが開かれます。なかでも今春，Sir Hans Krebs (Krebs サイクルの発見者) の80歳の誕生記念として約1週間セミナーがあり，Krebs 教授をはじめ弟子達（ほとんどノーベル賞受賞者）の講演を聞く機会に恵まれた事が特に印象に残っています。

先日は学会のついでにと，荒川教授にお立ち寄り頂き，カッタム教授夫妻，数人の日本人フェローと共に楽しいひとときを過ごしました（写真）。学会などでこちらにお越しの折は，ぜひお立ち寄り下さい。

連絡先: Dr. Jun Sasaki
大　学: 5323 Harry Himes Blvd.,
Dallas, Texas 75235
自　宅: 5912 Village Glen Dr. #215,
Dallas, Texas 75206

南イリノイ大学

桂木　猛

私は昨年7月 Heart Association の Fellowship により，イリノイ州の Springfield という小さな州都にある南イリノイ大学医学部に留学して参りました。

大学そのものは，ここよりさらに車で4～5時間南に下った Carbondale という町にあり，イリノイ大学などと共に1870年頃創立されたかなり古い州立大学（学生数ではイリノイ第2位）ですが，医学部のみは当地にイリノイ中南部の医師養成を目指して10数年前に設立されたものです。従って，その生い立ちに福岡大学医学部とは何となく相通ずる点があるようです。医学部といいましても，この町には臨床系（複数の研修病院と一体となったもので，日本のそれとは，かなりシステムが違うようです）のみがあり，面白いことに薬理学と微生物学はこの領分に組入れられております。そこで，生理学などの基礎系 department は先の大学本部の方に分散しており，事あるごとに教官は大学専用機で往き来している状況です。

このような医学部ですが，シカゴとセントルイスの中間点に位置する地の利から結構，各大学の有名教授の講演が，ゼミのスケジュールの中で聴け，開かれた大学という印象を受けますし，教官のポストも名実共に広く公募され，極めて厳正にその適性がチェックされるようです。ここでの私の仕事は purine 物質が真に交感神経系で CO-transmitter となり得るか否かの追究のため，ウサギ血管平滑筋を使って ^{3}H-adenosine の取込みと遊離の実験に明け暮れております（結果の一部は間もなくこちらの薬理誌，J. P. E. T. に掲載される予定です）。

さて，ここ Springfield はリンカーンゆかりの地として知られ豊かな自然に恵まれた落着いた小都市で，私の二人の子供達も伸び伸びと近くの公立小学校に通っております。人々は陽気で素朴で極めて親日家が多く，旧き佳き時代のアメリカ中西部人気質が，まだそのまま残っている所です。一歩郊外に出ますと一面の大豆とトウモロコシ畑で，山の姿は全く見られない大平原ですが，遙かな地平線に沈む，その巨大な落日の見事さは格別です。

機会あるごとにあちこち車で遠出しては改めて国土の広大さを実感として味わうにつけ，しみじみ日本とアメリカの生活様式から，さらには精神構造に至る諸々の差は，この面積の違いに帰せられるという気が致します。

しかし，そのアメリカも昨今のオイル事情の変化と工業力の衰退から，インフレと高い失業率に悩まされておりますが，生活実感から来る豊かさでは日本のそれとはまだかなり開きがあるように思われます。とにかく現在は残り少ない滞米生活をより有意義にという心境です。取りとめのない報告になりましたが，最後に福岡大学医学会々員の皆様の御健康と益々の御発展をお祈りしつつ筆をおきます。

1980年9月28日

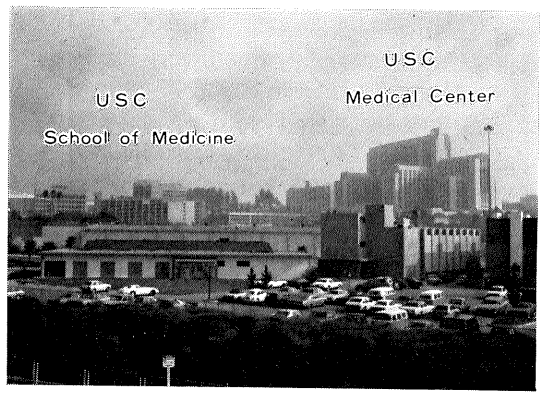
連絡先: Dr. Takeshi Katsuragi
Department of Pharmacology, Southern Illinois University School of Meolicine,
P. O. Box3926, Springfield, Illinois 62708,
U. S. A.

南カリフォルニア大学

小川皓一

先日は「医学会ニュース」を送っていただきありがとうございました。福岡大学医学部の近況などなつかしく読ませていただきました。

5月のはじめにロサンゼルスに着き，当初は生活の準備をしたり，車の免許を取りに行ったり，なれない所でなかなか大変でしたが，幸い昨年こちらの UCLA に来ておられた有吉助教授より，こちらでの生活についてのいろいろな情報をお聞きしていましたので，アパート捜しや車についての事などほとんど苦労することなく，大変助かりました。



U S C の 全 景

私の来ている所は，南カリフォルニア大学(USC)医学部解剖学教室で市の中心部に近く，市庁舎や Little Tokyo のあるあたりから車で10分たらずの所にあります（写真参照）。この教室の Dr. Kelly, Dr. Wood 両教授のもとで，仕事を始めています。現在，イモリの眼を材料にして，瞳孔の散大に関係する構造を電子顕微鏡的に明らかにしてゆくこと（これまで両棲類では，散大筋が存在するかどうかはっきり確かめられていないそうです）と遠近調節に関係あると考えられる平滑筋の分布，配列を調べようとしています。また時間があれば発生学的な観察や，他の動物種との比較もしてみたいと考えています。こちらで使っている器械類は，日本でなじみのあるものが多く，電子顕微鏡も日本製です。研究のやり方も日本とほとんど変りません。自分の仕事の他，9月から始まった新学年の講義（細胞，組織，発生学）を聴きに出たり，実習をのぞいたりしています。大学にいる時間は，特別な事のないかぎり，午前9時～午後6時ぐらいで土，日は休みです。

ロサンゼルスでの生活は日本とほとんど変らず，アパートの近くのスーパーでも日本食品が手に入ります，ラジオ，テレビも日本語の放送をやっています。比較的気楽に生活できるところです。ロサンゼルスの近くには，国立公園も多くありますので時間を見つけてはいろいろな所へ出かけて行こうと思っています。

皆様方の御活躍をお祈り致します。

連絡先: Dr. Koichi Ogawa
Department of Anatomy, University of Southern California School of Medicine,
2025 Zonal Avenue, LosAgeles, CA 90033,
U. S. A.

≪施≫≪設≫≪紹≫≪介≫

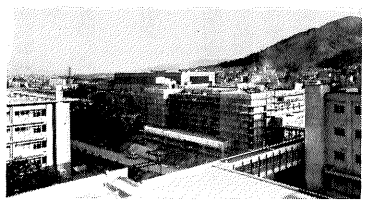
新しい講堂と医学部RI施設

現在アニマルセンター東側に建設中の三階建ての建物は、新しい講堂と医学部RI施設です（写真参照）。

新しい講堂

三階建てのうち二階と三階が講堂ですが、一階の北側（研究棟別館に面した側）は二階、三階の講堂のための広いラウンジになっており、研究棟本館、別館及び現在講義棟と渡り廊下で結ばれます。ラウンジの左右両端が二階、三階への階段ですが、二階西端にはアニマルセンターのスカイウォークが延長されてつながります。

二階の西側に一九二席の小講堂、東側に二四〇席の中講堂があります。いずれも座席後半分はゆるいスロープの階段教室になっており、黒板、スクリーン、スライドプロジェクター及び照明のコントロールなど立派な設備が設置され、大変使いやすい講堂になっています。



建築中の RI 研究施設および新講堂

三階は五〇〇席の大講堂ですが、正面には全面スクリーンが設置され、大きな影像が投写可能になっています。スクリーンの裏には講師控室があり、また東側には大講堂用のラウンジがあり、ここから東を望んだ時の福大の眺めは絶景です。二階も三階も廊下が広くゆったりとした雰囲気があり、落ちついて講義やテストがやれそうです。またこの大中小三つの講堂を使えばかなりの規模の学会も十分にこなせるものと思われます。

医学部RI施設

一階のラウンジの南側に小さな中庭をはさんでRI施設がありますが、RI施設の玄関は西側でアニマルセンターに面した所にあります。また二階のスカイウォークからも階段でRI施設へ降りることができます。医学部RI施設は全体で七八五㎡の広さです。

玄関を入った所に講習室及び管理室があり、汚染検査室を通って管理区域へはいります。管理区域には1、2、3、4の実験室、計測室、暗室、低温室、遠心機コーナー、純水機・製氷機コーナー、組織培養室、RI貯蔵室、RI分配及びγ線標識室、動物飼育室、洗浄室及び廃棄物保管室があります。

実験室1及び2は最も低レベルのRIを使う部屋で、主としてキット類を用いた preclinical な研究を行う実験室です。実験室3は主としてβ線を出すRIを用いる部屋で、実験室4はγ線RI用です。RI分配及びγ線標識室ではタンパク質のヨード化など最も hot な実験を行うことになります。動物飼育室では、糞尿の処理が床敷きを用いた乾式でやれる動物に限られますので、主としてマウス、ラットで、せいぜいモルモットまでしか使用できません。ウサギ、犬など大動物を用いたRI実験が可能な設備となるとこの数倍もの規模にならざるを得ませんので現状では無理のようです。これらの実験室の中心部に、計測室・遠心機コーナー及び純水機・製氷機コーナーなどがあり、大変便利に設計してあります。またいずれの実験室でも、実験用器機の配置まで考慮して設計してありますので、仕事のやりやすい実験室になっています。

最初の予定より工事が遅れていますが、三月末には竣工の予定です。講堂は四月の新学期から使えるものと期待しています。RI施設の方はこれから管理体制づくりを急がねばなりませんが、工事竣工後二ヵ月の準備期間を頂いて、六月初めには open できればと思っています。活発なそして規則正しい利用をお願い致します。

（文責　松岡）

自己紹介

◇……昭和五十五年四月以降十二月までに本学へ赴任、または昇格され……◇
◇……た助教授、講師の方に自己紹介をしていただきました。以下原文……◇
◇……のまま掲載します。……◇

戸惑いの四ヵ月

眼科学助教授　百枝　榮

昭和二十年四月九日生。三十五才。長崎県北松浦郡鹿町町歌ヶ浦出身で高校は小倉高校を昭和三十九年に卒業しました。昭和四十五年九大医学部を卒業。大学紛争の影響で卒業は7月で秋の国家試験合格後、九大眼科学教室に入局しました。以後ぶどう膜炎の臨床と実験的研究を主にやってきました。

こちらに移って約4ヶ月になりますが、まず感じたことは九大と比べて学生教育に対する比重が大きいことと外来診療の忙しさが殺人的であるということでした。また大島教授が硝子体手術で有名なため重症糖尿病性網膜症や難治性網膜剥離症例が多く集まるということで患者さんの質的相違にも最初とまどいを感じました。眼科は本来外科系ですので、大島教授のもとで手術学についておおいに勉強させていただこうと思っています。

趣味は広く浅く何でもやる方ですが、特に軟式野球、硬式テニス、ゴルフなどが好きです。好きということと技量とはあまり関係ありませんが…。九大では毎年春・秋に医局対抗野球大会があり、練習と試合で結構身体を動かす機会が多かったのですが、こちらでは現在行われていないということを聞き残念に思っています。

肝臓外科へ挑戦

外科学第二講師　佐藤　幹雄

略歴　昭和四十六年、九大医学部を卒業、同年九大第二外科入局。当時、学園紛争の余波により、臨床大学院がなかったため、昭和四十七年、九大医学部病理系大学院に入学。大学院の四年間、助手の一年間の計五年間、微生物学教室で武谷健二教授のもと、主として腫瘍免疫の勉強をさせていただきました。その後一年間、九州がんセンターで消化器外科の再トレーニングをうけ、昭和五十三年四月に福大外科学第二の助手として採用され、現在に至っています。

抱負　消化器外科のトレーニングをつけて以来、大腸疾患に興味をおぼえています。また、大腸癌は肝へ血行性転移することが多いという点より、最近は肝臓外科に対し積極的に取り組みたいと考えています。研究面に関しては、現在ほとんど行っていず、少々、焦りを感じながら、消化器悪性腫瘍に対する免疫学的アプローチを模索しています。

趣味　特に自慢できるものはありませんが、野球、テニスなどの球技。最近、ゴルフも始めましたが、ゴルフというより山歩きのようなもので足腰がくたくたに疲れます。

新刊紹介

福大医学会会員が執筆した著書または単行本を以下紹介する。（①書名②発行所③発行年④価格）

▷古川　達雄（薬理学）①臨床薬理・薬物療法学（分担）②理工学社③昭55④12,000円

▷天児　和暢（微生物学）①図説走査電子顕微鏡（分担）②朝倉書店③昭55④8,800円

▷永田　武明（法医学）①学生のための法医学（分担）②南山堂③昭55④4,000円

▷永田　武明（法医学）①標準法医学・医事法制（分担）②医学書院③昭55④4,900円

▷奥村　恂（内科学第一）①胆道疾患の治療（分担）②診断と治療社③昭55.8④4,500円

▷奥村　恂（内科学第一）①新臨床内科学第3版（分担）②医学書院③昭55.9④8,000円

▷西丸　雄也（内科学第一）①脳卒中のすべて（分担）②南江堂③昭55④6,800円

▷八尾　恒良（内科学第一）①新臨床内科学第3版（分担）②医学書院③昭55.9④8,000円

▷村田　豊久（精神医学）①自閉症②医歯薬出版③昭55.5.5④12,000円

▷西園　昌久（精神医学）①現代精神医学大系2B（分担）②中山書店③昭55

▷牛島定信・福井敏（精神医学）①青年期の精神病理（分担）②弘文堂③昭55.6.30④3,000円

▷小野　庸・奥寺利男（放射線科学）①放射線医学第2版（分担）②南山堂③昭55.5.10④15,000円

▷白日　高歩（外科学第二）①Bed-side meno（外科）—実地医家のためのノーハウー（分担）②世界保健通信社③昭55④5,500円

▷坂本　公孝（泌尿器科学）①泌尿器科学（分担）②日本医事新報社③昭55④14,300円

▷守田則一・柚木一雄（健康管理学）①吐血，下血（分担）②南江堂③昭55.5④4,200円

▷伊藤健・井上幹夫（健康管理学）①消化管ホルモン研究の動向（分担）②医学図書出版③昭55.5④6,500円

▷守田則一・井上幹夫（健康管理学）①消化器と免疫№5（分担）②医歯薬出版③昭55.7④4,000円

福岡大学医学会記事

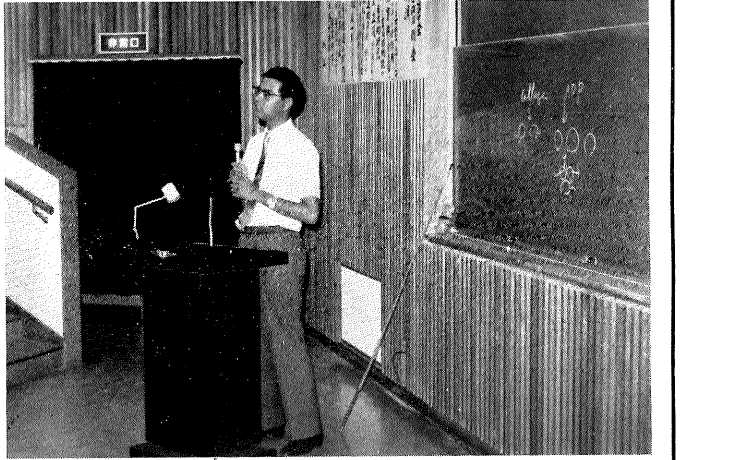
◉…第1回総会

日時　昭和54年1月31日（水）
会場　福岡大学医学部臨床大講堂

設立準備委員菊池昌弘教授の開会の辞につづいて議長を選出、荒川規矩男教授司会のもとに議事に入った。

まず設立準備委員長重松峻夫教授より本医学会設立までの経過報告、ついで会則についての説明があり、出席者全員（約一〇〇名）の賛成を得て承認された。

ひきつづき、西園会長の挨拶、来賓として列席された福岡大学伊東正則学長、九州大学松浦啓一医学部長の祝辞、祝電披露があり、無事総会を終了、第1回例会に移った。



第4回例会（講演中の山田講師）

◉…第2回総会

日時　昭和55年1月30日
会場　福岡大学医学部臨床大講堂

庶務担当幹事重松峻夫教授の開会の辞につづいて西園昌久会長の挨拶があり、議長に曽田豊二教授を選出し議事に入った。

1、事業報告

重松庶務幹事より本医学会創立以後の事業について左記のごとく報告された。

昭和54年1月31日
創立総会（規約決定、役員選出）
評議員会（幹事選出、事業予定審議）

昭和54年3月5日
第1回例会（学術集会）
評議員会（次期例会について、その他）

昭和54年4月20日
会則、役員名簿を会員へ発送
会費納入依頼（承諾書）

昭和54年5月22日
幹事会、評議員会（第2回例会打合せ）

昭和54年6月16日
第2回例会

昭和54年11月14日
幹事会（第2回例会、A. Starr 講演会打合せ）

昭和54年12月12日
Arnold Starr 講演会
演題「聴性誘発電気反応について」
参加者　約40名

昭和55年1月9日
評議員会（第2回総会、第3回例会打合せ）

昭和55年1月30日
第2回総会
第3回例会

なお次回より総会は六月に開催し、昭和五十四年度会計報告はその際行いたい旨提案があり承認された。

2、会計中間報告

会計担当幹事木船悌嗣教授より、昭和五十四年度会計中間報告がなされた。なお決算報告は前述のとおり次回総会で行われることになった。

3、その他

(1)会則改正の件

役員の任期のうち、幹事の任期を一年とする改正案が提出され承認された。

(2)役員交代の件

左記の新役員が推薦され承認された。

顧問　朝長正道病院長
評議員　黒岩中助教授、白日高歩講師
幹事（集会担当）松崎昭夫助教授

なお新役員（右記）の任期は四月一日からであるが、便宜上一月から活動して頂くことで了承された。

(3)例会運営の件

集会担当幹事池原征夫教授より、今回を含めて過去三回の例会は特別講演のみで開催されたが、会の発展に伴い一般演題募集も考慮した学術集会を考えていくべきであろうとの提言がなされ、その方向で検討されることになった。

以上で総会を終了、第3回例会に移った。

◉…第3回総会

日時　昭和55年7月5日
会場　福岡大学医学部臨床大講堂

重松峻夫庶務幹事の開会の辞につづいて、西園昌久会長の挨拶があり、議長に天児和暢教授を選出、議事に入った。

1、会務報告

重松庶務幹事より会計報告の都合上、今回より総会を六〜七月に開催することになった事情が説明され、ついで坂本編集幹事より「医学会ニュース」発刊に関する報告がなされた。

2、会計報告

木船会計幹事より、昭和五十四年度決算報告が行われ、ついで昭和五十五年度予算案の説明があり、了承された。

以上で総会を終了、第4回例会に移った。

◉…第1回例会

日時　昭和54年1月31日
会場　福岡大学医学部臨床大講堂

特別講演

1、糖尿病性網膜症の診断と治療
大島　健司教授（眼科学）

2、アルブミンの生合成とその分泌
池原　征夫教授（生化学第二）

3、細胞膜とイオンの動き
富田　忠雄教授（生理学第一）

◉…第2回例会

日時　昭和54年6月16日
会場　福岡大学医学部臨床大講堂

記念講演

わが国の医学教育の問題点
—欧米の実情と比較して—
西園　昌久　医学部長

西園昌久会長の挨拶につづいて、集会担当幹事池原征夫教授の司会のもとに、左記の三題の特別講演が行われた。

特別講演

1、インスリンの心筋への作用
今永　一成教授（生理学第一）

2、HLAと疾患
内藤説也助教授（内科学第二）

3、動脈硬化症と加令
竹林　茂夫教授（病理学第二）

◉…第3回例会

日時　昭和55年1月30日
場所　福岡大学医学部臨床大講堂

特別講演

1、うつ病診療—最近の動き—
奥村　幸夫講師（精神医学）

2、消化器診断学の目的と意義
八尾恒良助教授（内科学第一）

3、脳血管の自律神経支配
和佐野武雄教授（解剖学第一）

◉…第4回例会

日時　昭和55年7月5日（土）
場所　福岡大学医学部臨床大講堂

大学院学生研究発表

1、平滑筋に対するカテコールアミン（アイソプレナリン）のβ作用
那須　康典（人間生物系）

2、傾斜刺激による耳石器機能の実験的及び臨床的研究
河野　正司（病態機能系）

3、狭心症の運動負荷に於ける血小板凝集能と粘着能の変動
吉田　豊和（病態生化学系）

4、発達段階からみた摂食障害の症状構造
徳永雄一郎（社会医学系）

シンポジウム

痛みについて
座長　檀　健二郎教授

1、痛み感覚成立の機構
西川　望助手（麻酔科学）

2、薬剤による鎮痛機序
山田　勝士講師（薬理学）

◉…第5回例会

日時　昭和56年1月31日
場所　福岡大学医学部臨床小講堂

シンポジウム

痛みについて
司会　檀　健二郎教授

1、腹痛
有馬　純孝講師（外科第一）

2、腰痛
松崎昭夫助教授（整形外科）

3、精神科臨床における痛みの特徴
野中　幸保講師（精神科）

4、ヘルペスの痛み
比嘉　和夫講師（麻酔科）

講演

尿管膀胱接合部の異常
大島　一寛講師（泌尿器科）

福岡大学医学部昭和55年度の主な行事

55年4月5〜6日　第69回医師国家試験（八三名合格）
4月6日　入学式（医学部新入生一〇七名）
4月19〜20日　医学部三年次生専門課程オリエンテーションキャンプ
5月7日　医学部新入生歓迎会
5月21日　福岡大学創立記念日
5月28日　福友会懇親会
5月31・6月1日　医学部一年次生フレッシュマンキャンプ
7月5日　福岡大学医学会第3回総会および第4回例会
〃　大学院担任教育職員と大学院学生との懇談会
7月19日　動物慰霊祭・アニマルセンター研究発表会
7月23〜28日　第二回対馬巡回診療
9月27〜28日　第70回医師国家試験（七名合格）
11月1日　第7回医学部慰霊祭
11月15〜16日　第4回医学教育のためのワークショップ
11月26日　医学部父兄後援会
12月10日　福岡大学医学会幹事会
56年1月5日　新年賀詞交歓会
1月31日　福岡大学医学会評議員会・第5回例会
2月15〜19日　昭和56年度入学試験
3月2日　医学部第二次入学試験
3月13日　昭和56年度大学院医学研究科入学試験
3月21日　卒業式

編集後記

福大医学会が発足して、はや二年を経過した。この間、三回の総会、五回の例会がもたれ、本会もどうやら軌道にのって走り出した感がある。

周知のとおり、この「ニュース」も医学会活動の一翼を担うものであるが、創刊号では編集子に勇み足があり、各方面にご迷惑をおかけした。ことに、木船会計幹事には余分の出費を強いる結果となり、誠に申訳なく思っている。

それはともかくとして、このニュースが「会員相互のきめ細かいコミュニケーション・メディア」となり得ているかどうか。担当者としてもっとも知りたいことの一つであるが、余りにも陳腐に過ぎて魅力に乏しいことは認めざるを得ない。いずれ新しい担当者によって、斬新な構想が練られると思われるので、しばらくご辛抱願いたい。

さて、この号では、学外で診療や研究に従事している卒業生諸君からのニュースも盛り込みたいと考えていたが、残念ながら投稿がなかった。次回には是非、同窓諸兄への近況報告のつもりで、「便り」を寄せて下さることを希望する。

幸い、海外留学中の諸氏からは、三編のレポートを送って頂いた。いずれも、日常茶飯事の淡淡とした記述の中に、異質の文化に接した喜びと戸惑いが秘められていて、興味深く読ませて頂いた。ここに改めて、寄稿して下さった三氏にお礼申しあげ、ますますのご活躍をお祈りしておく。

毎度のことながら、各教室の情報は、それぞれのレポーターの方をわずらわせた。おかげで、学内の活動情況をうきぼりにすることができた。今後ともこの「ニュース」についてのご意見やご要望をお寄せ下さるようお願いする。

（K・S）